

ウィズコロナの時代における 地理学的フィールドワーク実習の実施とその注意点

鈴木修斗*・黄 璐*・張 紅*・佐藤大輔*・山下亜紀郎**・呉羽正昭**・
堤 純**

*筑波大学大学院生・**筑波大学生命環境系

本稿は、コロナ禍において実施された筑波大学大学院におけるフィールドワーク実習（上田巡検）の事例報告である。新型コロナウイルス（COVID-19）の流行下においては、聞き取り調査などの対面接触を伴う実習形式の講義（巡検）の遂行が困難である。そこで筆者らは、感染対策を伴う新たな巡検スタイルの構築を模索・実践した。コロナ禍で巡検を実施するにあたり、事前ミーティングや事務連絡はオンライン上で完結させることが可能である。調査時には徹底した感染対策を行うとともに、食事の分散化やゼミのオンライン化によって宿泊場所での感染拡大を防ぐことができる。また、現地調査を円滑に進めるためには、今まで以上に綿密な事前準備が重要である。以上のような対応をとることで、コロナ禍においても高い教育効果をもった巡検を遂行することが可能であった。こうした実践の成果は、ウィズコロナの時代におけるフィールドワーク実習の実施に際して、有益な示唆を与える。

キーワード：新型コロナウイルス（COVID-19）、フィールドワーク実習、地理学、オンライン、ウィズコロナ、長野県上田市

I はじめに

本稿は、2020年10月4日から10月10日の7日間にわたって長野県上田市で実施した、筑波大学大学院生命地球科学研究群地球科学学位プログラムの開設科目「地誌学野外実験 I」（上田巡検）の事例報告である。全国の大学の地理学教室の多くで、カリキュラムの一環としてフィールドワークを伴う実習が実施されていることは周知の通りである。しかし、2019年末からの新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的大流行により、野外でのフィールドワークを重視する地理学の教育カリキュラムは見直しが迫られている。地理学におけるフィールドワーク実習¹⁾の実態については、これまでに数多くの報告がある。例えば渡航地でのトラブルが想定される海外巡検の報告については、兼子・呉羽（2015）や坂本ほか（2017）

の成果がある。一方で「見えない敵」との共存が迫られる新型コロナウイルスの流行下において、学生の安全を確保しながらもいかにフィールドワーク実習を実施すべきか、あるいは実際に実施したのか、といった諸点に関する報告も必要であろう。

筑波大学人文地理学・地誌学研究室では、他の学問分野と異なる独自性の高いカリキュラムとして、フィールドワーク実習（巡検）を重視してきた。その詳しい内容については松井・兼子（2014）の報告がある。巡検は大学院生にとって教育を通じてフィールドワークスキルを身につける貴重な場であり、カリキュラムの中でも最も重要な位置付けがなされてきた。しかし、新型コロナウイルスの流行とそれに伴う生活様式の変容の下で、既往の方式で巡検を実施することは困難となった。一例として、対面接触を伴う指導や、大学院生が